五、時の旅人

妻が観光案内書を持ち出して、気に入った情報をノートに書き入れている。

結婚二十五年を記念し、飛騨高山と木曽の馬籠、妻籠を中心とした旅行を、一ヵ月前から計画してきた。夫婦として創造してきた日々を振り返り、「新たな人生をいかに築いていくか」を問う旅としたいと思っていた。

銀婚旅行の日程と宿は私のほうで決め、予約は済ませている。全日程が散策ベースの旅行で、散策する町の情報収集は、妻の役割だった。

次男が高校へ入学したころから、妻と二人の時間を意識するようになった。「親離れ、子離れ」をテーマに、二人の時間をどう創造していくかが、私の課題となった。妻にも意識させようと仕向けたが、全く意に介さず、今までと同様に、母親らしい甲斐甲斐しさで、子供たちと接していた。

妻には理屈は意味をなさず、その時々の雰囲気や、感性で動いている。今までと少しも変わらない生活を望んでおり、何事も消極的で、発展的に物事を考えられない性分である。ややもすると、進歩と縁の薄い女性となる。

今回の旅行でも、旅行の意義よりも、経済的なことや老後のこと、ヘルパーの仕事を休まなければならないことなどが先行し、妻を説得するのに一苦労している。しかし、一旦旅行が決定すると、今までの悶着が嘘のように「銀婚旅行」が中心の生活となっていた。時間があると、地図と観光案内書を読みあさり、気に入った情報があると、ノートに細かく書き綴っていた。

「旅行が楽しみね」

妻は瞳を輝かせ、行き先を想像しながら話し掛けてきた。

「日があるようだけどすぐだから」

「旅行も楽しみだけど、行くまでに色々と想像するのが一番楽しいみたい」

妻のノートを覗き込むと、ぎっしりと情報が書き込まれていた。

「高山で飛騨牛のステーキが食いたいな」

「ステーキなんか食べたくない」

「じゃーいいよ、どうせ俺はボディーガードに過ぎないんだから、お姫様の思いどおりにしてもらってけっこうです」

「いいえ、ご主人様に従いますわ」

妻は、ノートを見ながら、飛騨牛ステーキを食べさせる店の名前を、幾つか上げた。

「郷土料理の店でも、飛騨牛を扱っているみたい」

と、研究の成果を披露する。

「うさぎ舎のうさぎの置物」「手焼煎餅堂のお煎餅」「藤田鉄工工芸店の和蝋燭」

と、ノートを見ながら高山にいるかのような口ぶりで、お目当ての店について話してくる。

妻は規則的な生活の枠組みを一部取り外し、気持ちは既に飛騨に飛び、木曽に走っている。他愛ない言葉の遊びは、人生に彩りを添え、既に我が家も立派な舞台となっている。特別にあつらえた、舞台で展開される劇的な演劇よりも、演ずる者からすれば、遥かに喜びに満ちた演劇が、日常的に演じられている。

四十八年の歳月を経た妻の姿は、けっして大女優の艶やかさはない。顔だち、スタイル、声のどれを取ってみても、平凡そのものであり、むしろ、スター性を一切排除した、エキストラ的存在である。

妻の髪は、普段は染めているので目立たないが、白髪が大分増え、歳相応に小皺も増えてきた。夏の暑い盛りに散策に引っ張りだしているので、日焼けをし、色っぽさは少しもない。散策の効用で、身体は大分しまって、足取りは軽くなったが、食が進み、太るのが気になるところである。小柄で中肉、人込みに混ざると目立たない存在で、それを本分にしている。

人の顔は常に変化をしており、体調や精神状態、季節、時間帯、雰囲気などで、本人自体が変化し、見る側も同様で、その時々の条件で、顔が違ってみえる。同じ人間なのに、同じ顔を見せることはなく、千変万化、様々な顔を見ることができる。

特に見る側の心持ちで、「あばたもえくぼ」になり、「えくぼもあばた」になる。相手を思う気持ちが深くなればなるほど、他人から見て何の変哲もない人間が、特別に見えてくる。逆に、どんなに美しい者も、見る側の気持ちがそっぽを向けば、醜い顔に感じてしまう。

身体は、着飾ることでいかようにも変化をつけられようが、衣装だけが一人歩きし、顔は、どんなに念入りに化粧を施しても、誤魔化しがきかない。人の心と相まって、初めて引き立つもので、心の化粧をしないかぎり、美しさを際立てるのは難しい。顔は人生によって創られ、人と人との関係で創られる。

妻の「顔つき」は、私に責任がある。私の顔も妻に創られ、夫婦がお互いに顔を作り上げてきたと思っている。持って生まれた「顔だち」は、整形手術でもしないと変えようがないが、時に刻まれて創られる「顔つき」は、人生そのものを表している。

いつも柔和な妻の顔つきは、本人が持って生まれた性質もさることながら、妻の長所を殺さずに、より際立たせたのは、私の影響であり、妻に与えた環境が、より良いものだったと自負している。理想とはいかなくとも、妻に対する愛は誰にも劣らぬつもりであり、愛すればこそ精一杯尽くしてきた。妻がいつまでも優しさを滲ませていられのが、その証だと思っている。

夫婦がいつまでも、気持ちを合わせて幸福な日々を続けていくのは、奇跡に近い。二十五年も一緒にいれば、お互いにくたびれきった関係となり、そっぽを向き合ってしまうのが、普通なのかもしれない。幸いにも、未だに妻が堪らなく可愛いと思う。全く客観性のない心の眼で見た、思い込みの世界かもしれないが、笑みを湛えた瞳が、優しさに満ちた横顔が、あどけなさの残る仕種が、私の心をいつまでも捕らえて離そうとしない。

妻との二十五年間、全く波風が立たなかったと言っては、嘘になる。それはお互いをより理解するための試練であり、お互いを磨き合うための葛藤だった。新婚時代よりも、時を共に刻むのに従って、お互いの理解が深まり、結びつきは一層強まってきた。五年よりも十年、十年よりも二十年と、お互いの存在感が高まり、歳を取っても、若いころにも増して愛しいと感じられる。

毎日顔を付き合わせている妻が、最愛と感じられることほど、幸せなことはない。妻が特別とは思わない。自分も特別ではない。ごくありふれた夫婦が、ごく当たり前の人生を、自然体で歩んできたのに過ぎないのである。お互いを必要とし、お互いを大切にし、最愛、

最良と思い込んでいるに過ぎないのである。
「夫婦だから」と言って、安易に甘えて横着になり、お互いの関係をないがしろにしたのでは、結婚の意味がない。夫婦だからこそ、お互いの気持ちを大事にし、夫婦だからこそ、精一杯付き合っていく必要がある。
愛し合って結ばれた夫婦なら、気持ち次第で、いつまでもお互いが魅力的に感じられるはずである。相手の魅力が失せたとしたら、それは「自分自身に魅力がなくなった」と言うことでもある。お互いに影響し合って、魅力に磨きを掛けていければ、常に最愛の相手と一緒にいられることになる。それは又、愛し合って結ばれた夫婦なら、ごく当たり前の成り行きのはずである。
二十五年の時の流れは、私と妻とで受け止め方に、幾分違いはあるにせよ、「家族が一体となって、最良の人生を築いてきた」との気持ちは、一致している。
妻は自らの意思で変化に乏しい人生を築き、私は好んで変化に富んだ人生を築いてきた。妻の静と、私の動が両輪を成し、子供たちを乗せて、夢中で突っ走ってきた。
今正に頂点に立っており、それは又大きな区切りを意味している。二十五年と言う年数だけでなく、子供たちの自立と相まって、頂点を過ぎた新たな人生を、いかに創造していくかが問題となってくる。
今年で五十歳となり、自分が置かれている状況を考えると、人生に猶予がないと強く意識せざるをえなかった。家族、仕事、体力、能力、気力、ありとあらゆることが、老化と相まってがんじがらめになってきている。
「今自分に何ができるのか」と問うと、「あらゆるしがらみから解き放され、思いっきり自分をさらけ出したい」との答えが返ってくる。それは常に心の内に宿し、くすぶり続けてきた創作の灯である。
五十歳となったからと言うよりも、何十年も前から同じことを考えていた。三十歳でも、四十歳でも現状に甘んじたくないとの気持ちが働き、「成り行き任せから脱却して自分の意思で人生を切り開いていく」との思いが、創作へと繋がっていた。
一方で、公私共に充実した日々で、何の不足もなく、幸福に満ちていた。満たされた日々に切迫感はなく、気持ちのどこかに不足を残しながらも、猶予が感じられ、「そのうちに」との、安易な気持ちで押し流されてきた。
五十歳になって、全てがピークを過ぎたと意識すると、「今まで成しえなかったことが果して成しえるだろうか」との脅迫感が支配しはじめた。忙しければ忙しいほど、切迫感となって押し寄せてきている。「今やらねば一生できない」との思いを募らせ、特別に時間を割いて「どこまでやれるのか」を推し量らずにはいられなくなった。
今自分が心の叫びとして、どうしても語りたいのは妻のことだった。長い年月を経た今も、妻は私の心の内で大きく羽ばき、一段と輝きを増している。
妻の瞳は様々な顔を持ち、夫を気づかう妻であり、子を思う母であり、時として悪戯好きで、いこじな少女だったり、子犬にもおののく臆病な天使だったり、腕白も優しく包み込む、寛容な女神だったり、私が差し向けた台詞に呼応し、その時々で役所が変化していく。
妻の瞳は、時として私を幻惑し、翻弄し、魅了する。衣装や化粧は、けっして高価なものではないが、妻の瞳が輝きはじめると、安価なものが際立って感じられ、他人の目にい

かに映ろうとも、私の目にはこの上無い愛しい妻に映るのである。
妻を語ることは、我が人生を語ることでもあり、夫婦として過ごしてきた幸福な二十五年を振り返ることは、新たな人生を築いていく上での示唆がある。
「木曽路には十一の宿場があって、今も昔の面影を残す所が幾つもあるみたい」
と、妻が再び楽しそうに、話し掛けてきた。
「でも名物は五平餅とお蕎麦ぐらいで、お父さんが食べたがるものはないわ」
「うまい蕎麦が食えるなら、木曽での昼は蕎麦でいいよ」
妻の心はすっかり旅立って、瞳がきらきらと輝きだしている。妻の楽しげな顔を見ていると、こちらも楽しくなって、旅の目的は既に半分は達成できたと感じた。
私が舞台さえ用意すれば、妻は「自分が主役」とばかりに舞台に上がってくる。後は、妻を主役としていかに輝かせるか、私のシナリオの出来いかんにかかってくる。妻の演技をとことん観察し、つぶさに書き綴ってみたいと思う。今の私の究極的な目的は、そこにあるのかもしれない。
今までも「子離れ」を意識した舞台を、何度となく作り上げてきた。休日毎の散策、記念日のプレゼント、季節に合わせた名所巡り、グルメツアー、古都探訪など、私の創造してきた夫婦の触れ合いの時間は、妻を充分に満喫させてきた。
子供を全く無視できなくとも、恋人気分で旅をしてきている。家を離れると子供のことは意識から薄れ、二人の世界に没頭していく。経済的に有余がなく、限られた予算の中で旅をするのだから、おのずから行動範囲に制限がでてくる。予算は制限されても、心の持ちようで、二人の世界は際限なく広がっていく。些細な体験の、一つ一つが効果的な小道具となり、二人の気分は盛り上がって、常に最高の道行きとなった。
「お金ないわよ」と、妻に言われるとおり、このところ出費がかさみ、旅行費を捻出するのが難しかった。「銀婚旅行」と言っても、収縮予算で、宿の選定に当たっても、豪華さよりも値段で決定している。日数も、一週間が六日になり、五日になり、結局は三泊四日と短縮された。収縮予算の割りには、妻が好む、古い町並みを数多く巡り歩く、申し分のない計画となった。
無理をして、遠方まで車を走らせる価値があるのか分からないが、時を遡るのに相応しい舞台と考えると、飛騨や木曽は、大いに興味を引かれる町である。本当は、ごくありふれた旅であり、散策の延長に過ぎないのかもしれないが、私としては、どうしても特別な舞台にしたかった。
起床時間は予定より早く、五時前には起きだして旅行準備を始めた。準備は簡単に済ませ、早めに出発するはずだったが、予定より幾分遅れてしまった。妻が次男の食事のことが気になって、食事の仕度に時間を余分に掛けたのである。
昨夜の天気予報では、荒れ模様になると予報していた。外に出て空を見上げるとまだ暗く、空の状態がハッキリと分からなかったが、星が見えないので、予報通り天気は下り坂に向かっていると思われた。
今までに多くの旅行をしてきたが、荒れ模様の天気になったことが、何度もあった。七月中旬の、梅雨末期の大雨に見舞われるなか、妻と二人で、北陸、能登を旅してきた。不運にも、行く先々が集中豪雨となり、各所で洪水や土砂災害で道路が寸断される騒ぎだった。北陸自動車道でも一部通行止めとなり、迂回を余儀なくされて、最悪の状況だった。

旅行自体断念すべきだったのかもしれないが、しぶとくも「神々が、二人の仲をやっかんでいる」などと、呑気なことを言って、たっぷりと旅を楽しんできた。その時の大雨のことが蘇り、「今回もすっかり同じ状況になりそうだ」と、妻に語りかけた。
「神々は今回の旅行ではどんなことを仕掛けてくるんだろう」
と言うと、
「バカなことを言わないでよ、雨降りはごめんだわ」
と言って、妻は空を見上げた。
回りが幾分明るくなって、空の状況が確認できるようになり、妻は、今にも雨が落ちてきそうな空を、恨めしそうに見上げていた。
関越自動車道に乗ると、景色が展望できる明るさとなったが、前方に広がるのは色彩に乏しい、灰色が基調とした、白黒の世界だった。旅立ちの色合いとしては、祝福されていると言いがたく、ラジオから流れる天気予報も、大雨情報が中心で、全く予想外の展開となっていった。
今回の旅行は、準備を早めに始めて、用意万端のはずだったが、旅行に出掛ける五日前に、隣組で不幸があった。特に大きな葬儀となり、ちょうど隣組の班長をやっている関係で、ぎりぎりまで、妻と二人で葬儀に係わり、前日までおおわらわだった。旅行の準備が止むなく頓挫し、昨日の晩に、ばたばたと大慌てで準備をしての、旅立ちとなった。
二人とも疲れ切っており、妻はいつしかうとうとしはじめた。居眠りに気付いて、懸命に起きていようとしていたので、「寝てていいよ」と、声を掛けた。
「いいえ、ご主人様が大変な思いで運転しているのに、居眠りなんかできませんわ」
と言いつつ、うとうとしていた。
上信越自動車道に入ると、空模様は益々悪くなり、佐久平サービスエリアで腹ごしらえをしていると、車のフロントガラスが雨で濡れだした。いよいよ雨本番となり、「昨日まで晴天が続いていたのに、ここにきて何で雨にならなきゃいけないんだ」と、恨み言が出てくる。「疲れ切った旅だから、とにかくのんびりするしかないな」と自分に言い聞かせ、今後の展開を想像していた。
「雨なら雨なりの楽しみ方がある」と、負け惜しみを言いながら先へ進んだ。本格的な雨降りになり、山間に入ると朝靄が煙り、視界が幾分悪くなってきた。車窓に映し出される木々の色合いは、緑色から、黄色や赤茶色がベースとなって、深まり行く秋の装いに変わっていった。
山間の高速道路沿いに、まだ新しい大きな会社が所々に顔を出す。企業進出との関係があるのか分からないが、新しい住宅も、やはりあちこちで見受けられ、高速道路の開通と共に、急激な開発が行われている状況が感じられた。企業進出と地域との係わりや、自然破壊などの問題を意識しながら先へ進む。
所々で煙が立ち昇って、籾殻を燃やす香りが車内に入ってくる。視界を遮るほどではないが、幾分不快となる。だがそれは、秋の風物詩であり、日本の農業を支える人々が、営々と続けてきた農作業の一環で、文句を言う筋合いではない。
道すがら、車内で語り合うのも旅行の目的だった。日常生活でも、充分過ぎるほど会話を楽しんでおり、あらためて語り合わなくともいいと思うのだが、語り忘れたことが有るような気がして、いつもお互いに雄弁となった。しかし、今回は、無口になったとしても

致し方なかった。明らかに、昨日までの慌ただしさが、顔に表れていた。

長野自動車道に入り、煙と靄が混ざり合って、視界が大分悪くなる。山里がすっぽりと乳白色に覆われ、籾殻を燃す煙が原因と思って呆れていると、それは大きな勘違いで、濃霧が局所的に覆って、淀んでいたのである。幸いにも、濃い霧は高速道まで押し寄せてこなかったので、走行に支障はなかった。

雨は降り続いていたが、一定の雨足で、大降りになることはなく、今のところは、大雨による土砂災害の心配はなさそうだった。妻との道行きは、「神々のやっかみ」と愚痴りたくなることが、何度か起こっているので、嫌な予感を拭いきれなかった。

梓川の清流を越えると、松本の町並みが見えてくる。高速道を下りる前に、一服しに梓川サービスエリアに立ち寄った。未だ九時前で、中途半端な時間帯ということもあって、停車している車は少なかった。レストランに入っても客は一人もおらず、営業中の看板が出ていたが、従業員は清掃や準備をしていて、態勢が整っていなかった。むしろ準備中の感があり、あまり期待せずにコーヒーを注文する。

のんびりと語り合いながら、モーニングコーヒーを賞味すると、思った以上に円やかで、こくのある味わいだった。「美味いな」と言って、妻と顔を見合わせ、「片手間に入れたコーヒーではないな」と、お互いに認めていた。思いがけない美味いコーヒーを味わい、疲れが幾分抜けて、会話が弾んだ。

松本インターチェンジで、長野自動車道を下り、市街地を抜けて上高地へ続く道へと進んでいった。郊外に出ると、道路沿いの家々の庭木が目に入ってくる。どこの家も敷地が広く、庭の手入れが行き届き、けっこう目を楽しませてくれる。信州らしくリンゴ園もあり、小粒だが、色づいたリンゴが目に入ってくる。いつもは移動時間を短縮すべく、逸る気持ちに後押しされ、ついついスピードが出過ぎてしまうが、今日は至ってのんびりムードで、スピードも控えめになる。ふだんはのろのろ運転に、前を塞がれると苛々するのが、今日は少しも苦にならなかった。

安曇野に入ると、道路は梓川渓谷沿いを走り、急な登りが多くなる。梓川は雨模様で、濁りが入ってるのだろうが、それでも薄緑色をした流れは、清流に相応しい、清らかさを保っていた。木々が高度を増すに連れて、所々で色づいてくる。大きな銀杏の木がすっかり黄金色に衣替えしているのを皮切りに、紅葉狩りへと気持ちが切り替わっていく。

トンネルが幾つも顔を出し、高速道路のように照明が行き届かず、真っ暗なトンネルもあって、不気味に感じられ「化け物でも出てきそうだな」と、つい言葉が出てくる。梓川には小さなダムが幾つもあり、水が湛えられていて、水源地としての役割を感じさせる。

上高地に近づくと、今までの開発用道路との様相から、すっかり整備された、観光用道路へと様変わりする。上高地は北アルプスの登山口という役割だけでなく、上高地そのものの美しさが、多くの人々を魅了し、山奥に不釣り合いな数の、観光客を集めているようだ。上高地への一般車両の乗り入れ規制と相まって、上高地の入口近くに、観光客用の広い駐車場が造られている。中継基地の役割を果しているようで、あまりにも大自然とかけ離れ、不自然な感があった。

紅葉真っ盛りまで登り詰め、未だ開通して間もない、安房トンネルへと入っていく。長野県から岐阜県へと県境を越え、トンネルを抜けると、そこには嵐が待っていた。雨、風共に強くなり、「いよいよ神々のやっかみが始まったかな」と、心配となってくる。

途中、乗鞍岳へと入っていく、乗鞍スカイライン道路の標識が出ているが、未だ十月の下旬と言うのに、「積雪のため通行止」との案内が出されていた。

乗鞍スカイラインは、十五年前に職場の仲間と訪れたことがあるが、高所のために空気が薄く、車のエンジンが吹き上がらず、急な登り道になると、思うように登っていかなかったことを覚えている。

乗鞍スカイラインは、三千メートルを超える乗鞍岳の山頂近くまで登っており、最高地点は二千七百メートルを超えている。乗鞍岳は、既に長くて厳しい冬模様となったとしても、けっしておかしくないのかもしれない。

岐阜県側の道路は、安房トンネルに引き続いてすっかり整備されていて、洒落たレストランやホテルが顔を出す。「飛騨」と言う看板が多く出てきて、高山も間近だと分かる。松本側より、高山側の方が明らかに観光化が進んでいた。

心配された嵐も、高度が下がるに連れて、雨風共に弱まり、元の規則的な雨足に戻る。道路も、急なカーブや坂はなくなって、運転が非常に楽になる。今日の行程の山場を越えた感があり、ホットする。

妻は、高山に近づくに連れ、期待感とともに目が覚めたらしく、口数が多くなって、仕入れた情報を披露する。道沿いに大きな看板が多数出てきて、高山の観光案内がされているが、妻はスケジュールをきっちりと決めていて、看板の情報には目もくれず、先へ進んでいった。

雨のなか、思った以上に順調な走行で、高山には十一時に着いていた。かつて二度高山を訪れているが、いずれも「遠くて大変だった」との印象が残っていた。今回はのんびり運転で、休憩も多く取ったにもかかわらず、自分の住む熊谷から、約五時間二十分の行程で、高山が非常に手近になったと実感する。

上信越自動車道や、長野自動車道の全線開通、安房トンネルの開通などで、大幅に時間短縮が可能となった。飛騨のみならず、木曽も気軽に訪れられうようになり、高速道路の効用を、あらためて実感する。

車で旅行をするとき、町から町への移動は、地図や標識を頼りに何とか辿っていけたが、市街地に入るとそうもいかなくなる。駐停車が難しく、進入禁止や、一方通行などの交通規制があり、標識に出てくる地名が、余所者には馴染みが薄く、案内板の役割を果たさなかったりする。

町の事情を知らずに市街地に乗り込むのは難しく、徒歩なら地図を頼りに何とかなっても、車では、目安となるものを確認し、方向を定めていかないと迷ってしまい、無駄な時間を費やすことが何度もあった。その点、駅に対してはどこでも非常に親切で、標識を頼りに間違いなく駅に辿り着く。駅を起点に行動を開始するのが一番無難である。本当は、駐車場を早めに見つけ、徒歩に切り替えるのが一番である。

高山の市街地に入ると、先ずは標識を頼りに駅を目指す。妻に地図で確認させるが、至って不案内で、方向が全く分からなくなってくる。結局は標識だけを頼りに進んで、何とか間違えずに高山駅に辿り着いた。

駅に到着すると、妻は観光案内所に行き、高山の各所にある、観光地の入場料が割引されるという「エコパスポート」と名付けられた、観光案内書を購入してきた。妻の旅行に対する研究成果が、早速披露された。

雨天ということで、今日は車で移動しながら観光しようと、安易に考えていたが、過去の例に漏れず、いざ町中を走りだすと、思うように動けなかった。駅を起点に方向を定めて進みだしたのだが、交通規制に阻まれ、中々目的地に着けなかった。

妻の道案内が当てにならず、車を停車できる場所を見つけ、自分で地図を確認しては、進むという、まどろっこしいドライブで、まごまごしているうちに、昼になっていた。

「駐車場のあるそば屋はないの」と、妻に問うと、高山を代表する観光ポイントである、上三之町の、古い町並み通りの店の名を上げた。上三之町へ近づくと、平日で雨降りというのに、観光客が多数押し寄せて、とても車が入っていける状況ではなかった。

車を何とか停車して、「お店に行って駐車場のことを聞いてこいよ」と、妻を確認にやった。

自分で店の場所を地図で確認すると、妻が考えていた通りと、一つ道筋が違っていた。妻は中々戻らず、「間違っているのを気付かずに、ずっと先まで見にいってるのに違いない」と、気になってくる。

「子供ではないのだから、気が付けばそのうち戻ってくるだろう」と、呑気に構えていればいいのだが、二十五年の関係は、「迷子になったのでは」との、心配が先に立った。

夫婦の関係のみならず、子供たちを含め、我が家の過去の歴史は、何事も私主導で動かしてきた。何をするにしても、私が全てをお膳立てし、家族が付いてくると言う、決まった形態をとってきたのである。

妻や子供たちが望む前に、常に先回りし、新たな経験の場や、道具を用意した。大方私の思惑通りに進み、妻は何のためらいもなく私に依存し、子供たちも同様で、結果として価値観の相違が生じずに、気持ちを合わせてやって来た。子供たちの反抗期を経験せずに、今に至ったのである。

私のやってきたことは「家族が一つになって人生を楽しむ」と言う効果はあったが、一方で、妻や子供たちの自主性を削ぐ結果となった。未だに「お膳立てをしてくれるだろう」との、家族の甘えを払拭できずにいる。

特に、妻には過保護になって、「一人でやらせる」ことはほとんどなく、妻も「亭主が何でもやってくれる」と決め込んでいる。妻は道を覚えるのが苦手で、何度も散歩をしているコースでも迷ってしまう。妻が道や地図を理解しようとしないのは、明らかに私の甘やかしが悪いのである。

妻を待っているのが長く感じられ、「早く戻ってこい」と、叫びたくなる思いだった。常に目の届く範囲に妻がいないと、心配で一時もいられないのである。本当は、ほんの僅かな時間だったのかもしれないが、苛々しながらの時間は、非常に長く感じられ、妻に対する様々な思いを巡らせていた。

妻が姿を現し、「子供ではないんだ」と実証されたが、気持ちは治まらず、妻が車に乗り込んでくると、ついつい「どこまで見つけにいってたんだ」と、声を荒らげていた。本当は「心配で仕方がなかった」と、言いたかったのかもしれない。

「旅は歩いた量で価値が決まる」との、我が家の家訓を忘れ、妻の不案内を承知で、市街地を車で移動しようと考えた自分が悪かったのだが、思いどおりにならないのを、妻の所為にしてしまう。多少の雨なら、初めから相合い傘と決め込んで、歩いていれば何の問題もなかったのである。

二台分のスペースしかない、狭い駐車場に何とか車を付けて、そば屋に入っていった。古都に相応しい古びた佇まいで、蕎麦だけでなく、情緒も売りものだった。店構えで想像するよりも、中は広く、大いに賑わっていたが、待たずに席に付けた。観光客がほとんどで、外国人も何組か混ざっていた。

時間をロスしたことで不機嫌になっていたが、折角の旅が、不愉快では勿体ないと思いなおして、妻と語りながら、気分転換を図った。蕎麦の味わいに舌鼓を打ち、値段はちょっと高めだったが「情緒も味わえれば安いものだ」と、昼の一時を楽しんだ。

そば屋を出て、先ずは駐車場を探すことにした。賑わいが幾らか途絶えた、高山屋台会館に隣接した、駐車場に車を止めた。散策の身支度をし、車を出ると雨はそれほど強くなく、相合い傘と決め込んで、傘は一つしか持たなかった。

雨は相変わらず一定の降り方を保って、相合い傘には程よい加減だった。腕を組んで寄り添いながら歩きだすと、気分は上々で、銀婚旅行ならぬ、新婚気分となった。

「高山屋台会館」は、桜山八幡宮の傍らにあって、秋の高山祭で引き回される十一台の屋台のうち、四台が交代で展示されている。「高山祭」は春と秋年二回行われ、秋の高山祭は桜山八幡宮の例祭で「八幡祭」とも呼ばれている。

先ずは桜山八幡宮で、子供たちの幸福と銀婚旅行の安全を祈願し、その後、屋台会館を見学することになった。高山祭も是非見たいと思うが、混雑を考えるとその気になれず、わざわざ日程をずらして今回の旅行となった。屋台会館で「少しでも祭りの雰囲気を味わえれば」と思って訪れたが、祭り気分にはなれず、屋台一つ一つの、見事な出来栄えを堪能するしかなかった。

自分が住んでいる熊谷にも、高山と同様「うちわ祭り」と呼ばれる、祇園祭りがあって、屋台の引回しもある。熊谷の屋台も立派だと思っていたが、高山にはとても及ばない。飛騨に対する知識は乏しく、「匠の里」として、飛騨から多くの名匠を輩出していることを、今回の旅行で知った。

高山屋台会館の向かい合わせに「桜山日光会館」と言う展示館があり、日光東照宮の十分の一の大きさの模型が展示されている。ただ単に簡易なミニチュアではなく、木工、木彫、彫金、彫漆など、飛騨の匠の技の辣腕振りと、心意気が披瀝された造形物で、精緻を極めた芸術だった。

飛騨の地域性で、冬になると雪に閉ざされ、地道な作業をこつこつと積み重ねて培われた技術が、匠となったのであろう。匠の技を支えてきたのは、同じことの繰り返しを、辛抱強く続け、より精密な技術を体得した者であり、偉大なる凡人でなければ、成しえない世界なのかもしれない

左甚五郎も飛騨の出身ということで、代々多くの工人が、全国を又にかけて活躍し、各地に飛騨の匠の技が、多く残されているようだ。屋台に施された様々な飾り物も同様で、「匠の技と心意気」が、正に高山を代表しているのだと、実感した。

参道を相合い傘で歩きはじめると、飛騨牛がうたい文句のコロッケを売っていた。昼食を済ませたばかりなのに、うたい文句に乗せられて、ついついコロッケを注文していた。

長椅子に腰掛けて、あつあつの飛騨牛コロッケを頬張って賞味する。牛肉よりも、ジャガイモの味が秀逸で、「美味いな」と言って、妻の顔を覗き込むと、あつあつのコロッケが口を塞いで、言葉の代わりに、瞳が「同感」と、満足そうに応えていた。

目を引く道筋を選んで、腕を組みながら、相合い傘で進んでいく。午前中に迷って車で行ったり来たりした道なので、見慣れた景色となって迷うことはなかった。

どの道筋にも、奥ゆかしい佇まいの店が何軒かあって、民芸品を中心とした、織物、小物、雑貨、木工品などを売っていた。店を一つ一つ覗き込み、妻は大いに興味を示し、瞳を輝かせるが、何も買わずに店を出る。

「欲しければ買ってもいいんだよ」と、促すが、「お店は一杯あるみたいだから、他も見てからにする」と、みずからに言い聞かせるように、答えてきた。本当は、すぐにでも手を出したいと思っており、遠慮をしているのは明らかで、しおらしくなってくる。

雨は二人の道行きを邪魔するものではなかった。熟年夫婦の腕組みは、若干気恥ずかしさがあったが、雨が言い訳となって、違和感なく振る舞えた。身体を引き寄せて、妻の温もりを感じながら相合い傘を楽しんでいると、時間を大きく遡り、恋人気分で優しい言葉が自然に湧き出てくる。

「雨に濡れるよ」と、傘を妻に寄せると、「お父さんこそ濡れちゃうわ」と、押し返してくる。

「高山はとっても綺麗な町ね」

「高山の人々の、町を大事にしする心意気が感じられるな」

高山の町に、マッチさせることを意識して造られたと思われる、まだ出来上がって間もない、情緒溢れる和風建築の佇まいがあった。羨ましく思いながら「こんな家に住ませてやりたいな」と、本気で言葉を投げかけると、「とっても素敵ね、でも高望みはしないは」と、殊勝な返事が返ってくる。

やがて、古都高山を象徴する格子戸の、情緒溢れる店が軒を連ねる道筋に出る。平日だというのに、古き町並みは観光客で溢れていた。いつもなら、人込みを嫌って避けて通り過ぎるのだが、二人の世界に没頭し、雑踏が全く気にならず、人の流れに準じて足を踏み入れていた。

町家建築と言われる、江戸時代から営々と続く家々が、道の両側にぎっしりと軒を連ねていた。飛騨の匠の技と、心意気が凝縮された建造物で、ただ単に、古さだけが引き立つわけではなかった。格子戸の造りだす、規則的な陰影が郷愁を誘い、日本人が本来持っている、固有の美意識をくすぐる、美しさも兼ね備えた町並みだった。

町並みは、美しさと合わせ、機能性も考慮されており、防火や融雪の用水路として、道路の両側に側溝が造られている。雨が降っていても、雨垂れや水溜まりを気にしないで散策を楽しめる。現代でも、充分通用する町並みで、むしろ、安直な住宅政策や、道路政策で精一杯の現代行政を考えると、高山の町家造りは遥かに進んでいる。

町並みの素晴らしさもさることながら、高山の人々の心意気も心を打つ。保存と生活が一体となって、日本人の心の故郷として町並みを営々と維持してきたことに、脱帽せざるをえない。盲目的に、新しさばかりを追い求める現代にあって、誇りを持って伝統美を継承しようとする姿に、学ぶことが多い。

十五年前に、職場の仲間と高山を訪れ、古き町並みを散策したが、古さだけが心の片隅に残っているだけで、特別な感慨は浮かんでこない。ありふれた観光ルートを、規則的に足を運び、心は妻や子に飛んで、家族旅行の下見となり、心のこもらぬ映像として、僅かに残っているだけだった。

相合い傘で踏み入れた古都は、正に、銀婚夫婦の道行きに相応しい大舞台で、全てが二人のために特別にあつらえられた、大がかりなセットであり、「ドラマチックな映像を、いかに作り上げて行く」かが、義務づけられていた。

人込みの中、妻を守るようにして、店を一軒一軒覗き込んでいく。雑貨、染物、和紙、焼き物、木工など、みやげ物を売る店や、味噌醸造、酒造、郷土料理、喫茶など、食べ物を扱う店などがあり、どれもが町家造りの奥ゆかしい店構えで、情緒がたっぷり味わえる。

妻にとっては「おとぎの国に足を踏み入れた」気分と見えて、いつになく華やいでいた。妻の姿は美しい町並みにすっかり溶け込んで、私の目には「古都に最も相応しい華麗なるヒロイン」になっていた。そんな妻が誇らしく、胸元に引き寄せて、周りのエキストラに見せびらかしていた。

同様な品物を扱っている店が幾軒もあり、値段も変わりがないので、つぶさに見て回る必要はないと思ったが、妻は、品物以上に雰囲気を堪能しているようで、軒を連ねた古風な店店を、片っ端から覗いていった。お目当ての品を見つけては、瞳を輝かせ、手に取ってじっくりと吟味している。しかし、値段を見ては、「高いわね」と言って、元に戻していた。

妻のノートに、必見と位置づけられた「うさぎ」をモチーフにした、雑貨や小物などを扱う店を訪れた。妻はうさぎ年生まれで、以前からウサギグッツを集めてきた。趣味の乏しい妻にとって「うさぎ」を見つけ歩くのが、大きな楽しみになっており、旅行に出るとウサギの置物を見つけ出し、買い集めてきた。妻の部屋にはウサギ専用の棚があり、ウサギの小さな置物がぎっしりと並んでいる。

店に入る前から、妻の口元は自然にほころんで、ウサギだらけの、とっておきの世界に入ると、妻は何のけれんみもない、夢見る少女にすっかり変身していた。その可憐さは、私の心を捕らえて離さなかった。

ウサギの形をした、陶器、硝子、木工、布細工、紙細工や、ウサギが描かれた絵皿、布製品、紙製品など、ウサギグッツが所狭しと並んでいた。鰻の寝床のように奥行きのある店で、展示された品物の数は尋常ではなく、妻は食い入るように、一つ一つを丁寧に品定めをし、時間をたっぷりと費やした。

他では手に入りそうもない、珍しい品物が数多くあり、妻は心を動かしているようだったが、値段との折り合いが付かないと判断したのか、お目当ての品を元に戻し、次の品物へ視線を移そうとした。

「気に入ったのがあるなら買えば」と促すが、「高いからよしとく」と言って、次へ足を運ぼうとした。

「他では手に入らないかもしれないぞ」と、妻を制止するが、少し考えて、「でもいいわ」と言って、諦めようとした。

少しじれったくなり、「せっかく高山まで来たんだから、気に入ったものがあるのに買わない方が勿体ないんだぞ」と、叱るように言って、妻のお目当ての品を手に取り、無理やり買うようにする。

値段が高いと言っても高が知れていて、躊躇するような問題ではなかった。日常の生活でも、二人で買い物に出掛けると、妻は欲しいと思っても、いつも買い控えており、「おとうさんも何か買わない」と言って、私も買わないと踏ん切りが付かなかった。

人並みの生活スタイルを維持するには、私の収入だけでは非常に難しく、余分なものをできるだけ省かないと生活が成り立たなかった。特に衣類が経費削減の対象となり、流行とかけ離れた、実用本位の安物で間に合わせるしかなかったが、妻は少しも不満を漏らさなかった。

安価で簡単に手に入るものでも、妻は無駄遣いを嫌って「簡単に手に入る」と言う、意識は持っていなかった。「欲しい」と言う気持ちをたっぷり募らせ、安価なものでも非常に価値あるものとなって、手に入れると、「やっと手に入った」との満足感に浸り、いかにも嬉しそうな顔をした。むしろ、貧乏暮らしの効用を、充分に享受していた。

妻が見せる、ためらいがちな仕種がいじらしく、私の心を無性に引きつけて、愛しさが一層募った。たくさん買ってやりたいと思ったが、妻は、ウサギの小さな置物と、ウサギの模様が入ったレターセットを選び、それ以上は望まなかった。妻は、お目当ての品を手にすると、幾分頬を紅潮させ、いかにも嬉しそうな笑顔を返してきて、私を満足させた。

雨のなかに出て、「濡れるよ」と身体をそっと引き寄せ、妻の温もりを感じ取ろうとした。私の、抱きしめたいとの気持ちに応えるかのように、妻は頬を胸元にそっと押しつけてきた。雨降りが二人には最高の舞台になっていた。

二人のために特別にあつらえた舞台で、最高のドラマを演じていた。気分は最高に盛り上がり、二人の世界に酔いしれていた。全てが二人を中心に動いているようだった。妻は主役として申し分無い輝きを放ち、私の心のなかで華麗に舞っていた。

ごくごくありふれた二人でありながら、ごくごく自然の成り行きとして、テレビや映画が作りだす、ただ単なる空言の、特別な美男美女の演ずるメロドラマよりも、素晴らしいロマンスを感じていた。

テレビや映画を見て、指をくわえて幻想を抱くよりも、本当の自分の人生として、ロマンスを作り上げて行かなければ意味がない。愛する妻がいつも傍にいればこそ、最高の人生を築いていける。

町家巡りも一区切りし、一息入れながらぶらついていると、町角の大きな店の軒先で、飛騨名物の五平餅を焼いていた。香りに誘われて、ついつい購入し、若干癖のある味噌の味に、「ちょっと合わないかな」と評してみたり、飛騨牛の串焼きを「脂が少なくて淡白過ぎる」と評してみたり、少々口うるさいことを言って高山を味わった。

妻が「是非味わってみたい」と言う、手焼き煎餅の店を訪れた。妻は煎餅が大好物で、しばし、土産に買って帰った。誕生日、結婚記念日、ホワイトデーと、私の勤務地にある煎餅屋の、海苔の巻いた煎餅を、贈り物にした。

店先で煎餅を焼いており、醤油の香ばしい香りを漂わせ、食欲をそそっていた。未だ醤油が乾ききらず、柔らかさの残った煎餅を口にして、妻は、「とっても美味しい」と、期待通りの味わいに満足の意を表した。

喫茶店も町家造りで、二人には、少々大き過ぎるテーブルに座った。お互いに疲れを見せず、古都を満喫していたが、腰を落ち着けると、疲れがじわりと押し寄せてきた。町家造りに不釣り合いなレゲエ音楽が流れていて、若干違和感を持ちながらも、多少は疲れを癒してくれた。

コーヒーを飲みながら、ゆったりとくつろいで、ちょっと離れた妻の瞳を覗き込んだ。お互いに言葉少なでありながら、多くの語らいを感じ、テーブルの距離ほどの隔たりはな

かった。妻は、私の心をすっかり読み取っているかのように、私の感情に呼応して、望むがままの笑顔を返してきた。

いつしか時を遡り、夫婦として過ごしてきた二十五年の歳月が、走馬燈のように蘇り、おしどり夫婦が幸せ一杯に、時を旅していた。

「自分はわがままで、何でも思いどおりにする人間だけど、それでもよければ結婚してくれ」

と求愛すると、妻は何のためらいもなく頷いた。

陣痛が始まって、妻の苦しむ姿に、不安が募るばかりで、何もしてやれない自分の無力さを感じながら、産院の長椅子で初の出産をじっと待っていた。不安に駆られ、無事を祈る思いと「無事出産」の知らせを聞いた時の安堵感が、脳裏で交錯する。

新しい命に夢中になって過ごしてきた日々が、子供を乳母車に乗せ、満足そうに押す自分の姿がよぎっていく。公園に行くと、長男より少しとしかさのいった保育園児が遊んでいて、「一緒に遊んでおいで」と言うと、長男は傍まで駆け寄って、仲間に入ろうと、じっと佇んでいた。

次男が三才の時、呼吸器官の病気で二十日ほど入院し、子供と付添いの妻の顔を見ずにいられず、組合運動の忙しいさなかにあっても、毎日病院に足を運んでいた。次男の細い腕に、点滴針の痕が幾つも残る痛々しい姿と、心を重くした妻の姿が浮かんでくる。

下北半島の小さな食堂で、いかにも紳士らしい高齢のシェフが、味合わせてくれたピザは、我が家の伝説となり、ピザの話が出ると、家族みんなが顔を見合せ「下北のピザを食べたい」と口ずさんでいた。

秋田、抱き返り渓谷で、川遊びをしているとアブに襲われ、子供たちと必死の攻防を繰り返している姿は、子供たちが本格的な冒険へ踏み出した、第一歩として記録されている。

北海道知床で、カムイワッカ湯の滝を危なっかしい足取りで登っていく妻の姿と、心配そうに見守る子供たちの大人っぽい眼差しが大きくクローズアップされ、子供たちの成長に歓喜する自分がいる。

摩周湖の神秘的な湖面を展望していて、私がちょっと身体を乗り出すと、「湖に吸い込まれてしまう」とでも感じたのか、妻は今までに見せたことのない恐がりようで「危ないからそんなに前に出ないでよ」と、悲鳴をあげていた。

母に、一度も口答えをしたことがない妻が、母が私を誹謗すると、「真一さんはお母さんのことを最も大事にしているのではないですか」と言って敢然と反発し、母と訣別となって、悲しむ妻の痛々しい姿があった。

金沢の町を妻と二人で散策し、自分たちがやけに古い町並みにマッチする気がして「生まれてきた時代を間違えたみたいだね」と語り合い、妻が町並みに溶け込んでやけに美しく感じられたことが蘇る。

思い出は子供を交えたものが多く、スキーや海水浴、キャンプ、カヌークルージングと数えきれない。子供たちの喜ぶ顔と成長が、私たち夫婦にとって最も大切なものであり、幸福のバロメーターだった。夫婦の年輪を顧みると、それは家族の歩みだった。

喫茶店を出て、ルートを吟味しながら車に戻りはじめた。雨は一旦上がって傘は必要としなかった。それでも腕組みは解かず、恋人気分で歩いていると、かなり高齢と思われる紳士が、いかにも急いでいるという足音を立て、前を歩いていた。

老人の歩く速度は「急いでいる」と言っても、私たちののんびりした歩みよりも遅く、小刻みな規則的な靴音と、息づかいだけがやけに大きく響いていた。そのうちに、息づかいと靴音に乱れが生じ、前に倒れ込むようにうずくまってしまった。

妻が走り寄って「大丈夫ですか」と尋ねると、少し間を置いて、頷きながら「大丈夫」との返事がやっと返ってきた。あえぐように呼吸をしていて、尋常とは思えなかったが、老人にとっては充分心得ている状態とみえて、私たちを頼ろうとはしなかった。少しすると、再び同じ息づかいと靴音を立てて歩き出し、暫くすると再びうずくまっていた。

果して急いでいるのか、それともそれが通常の歩みなのか見当が付かず、命を縮みかねない姿を見過ごせないとも思ったが、結局は余計なお節介になることを恐れ、手出し無用と判断した。

恋人気分で高山の町を闊歩し、夢見るような時を味わっていたが、一気に現実に戻されてしまった。早五十となり、老化が確実に追いかけてきていた。妻と二人「どんな老後を送るのか気にならない」と言うと嘘になる。年老いて「命懸けで先を急ぐ」のかと思うと、やり切れなくなった。

老いてはどんなに気張ってみても、成しえないことが数限りなく出てくる。熟年となり、やはり「今となってはもう不可能」と感ずることが、「いや」と言うほどある。今やれることは、今のうちに精一杯やっておきたいとの思いが、一層強まってくる。

古い町並みを後にして、今日の宿に向かう。予算の関係で安価に泊まれる、高山駅近郊のビジネスホテルを予約してあった。宿には四時前に着き、部屋に入るとすぐにベットに横になった。疲れが出て、食事の時間までのんびりと休んだ。

夕食は外で食べることにしてあって、雨降りの、夕闇に包まれた町に繰り出した。再び相合い傘としゃれこんで、先ずは駅に向かい、駅を起点に道筋を定めた。駅周辺は照明が行き届き、非常に明るかったが、賑わいはそれほどでもなく、人の流れは通学の高校生が中心だった。

気まぐれに、駅構内に入って時刻表を見ると、列車の本数は大分少なかった。古い町並みは観光客でごった返していたが、駅は至って長閑で、利便さを考えると、観光客が列車離れをしても、致し方ないと実感する。自分自身を考えても、旅行は車が中心で、経済的にも、時間的にも、車は列車より遥かに勝り、列車が縁遠くなっていた。

未だ六時を少し回っただけだったが、駅から離れると照明が行き届かなくなり、メインストリートから道筋を替えた途端に暗くなった。家の中から零れてきた明かりを頼りに、相合い傘で、おしくらまんじゅうをするようにぶらつきながら、今日の晩餐を予定した、店を探し歩いた。

古い民家を思わせる、郷土料理の店に辿り着き、古めかしい暖簾をくぐって店に入る。満席ではなかったが、いかにも観光客と思われるグループを中心に賑わっていた。中には、アジア系外国人の団体もいて、意味不明の言葉が飛び交い、非常に賑やかだった。

妻の下調べでは、飛騨牛も扱っているとのことで、私の「飛騨牛のステーキが食いたい」との希望も取り入れた、店の選定だった。少々値のはる飛騨牛ステーキは断念し、飛騨牛も多少は味わえる和定食を注文した。出された料理はどれも品のあるあっさりしたもので、年齢から言っても、疲れ気味な体調から言っても、銀婚夫婦にマッチした味わいだった。ただ、飛騨牛に関してはけちったのが原因か、物足りなさがあった。

お互いに口数は少なかったが、見つめ合った瞳が、相変わらず多くの語らいを感じさせ、妻の満足そうな顔を見ているだけで、最高の晩餐となった。銀婚夫婦の道行きは、初日から百パーセント目的を達成した。

目が覚めて、耳に入ってきたのは雨音で、規則的な雨垂れの音が、皮肉っぽく感じられた。昨夜の天気予報では、午後に雨は上がるようだったが、朝市の見学は、相合い傘にするしかないと考えていた。

ホテルを出ると雨は上がっていて、傘は必要としなかった。空は分厚い雲に覆われ、いつ雨が降ってもおかしくない状況で、傘は持参することにした。

高山の地理に大分明るくなり、地図を見ながらではあるが、迷うことなく進んでいった。高山市街を流れる宮川沿いに、小さなテントの出店が、二百メートル以上に渡って軒を連ね、朝市が開かれていた。

朝市には観光客が多数訪れ、朝から大変な賑わいだった。朝摘みの野菜や、果物、味噌、漬物、民芸品などが並んでおり、観光の土産と言うよりも、日常の食料品が多かった。朝市よりも、朝市に合わせて開店している、対面のみやげ物屋の方に興味を引かれ、覗き込んで土産を買いあさった。

昨日、情緒をたっぷり味わった古い町並みは、宮川朝市からすぐで、ついでに寄っていくことにした。今日は店を覗き込むより、町家建築の情緒を楽しむということで、腕を組んでのんびりと散歩した。何度歩いても気分は盛り上がり、朝の一時を満喫した。

十時前にホテルに戻り、車で移動しての観光に切り換える。高山郊外にある「飛騨の里」を訪れることになっていたが、その前に、天神様で知られる、学問の神様、菅原道真公を祭った「飛騨天満宮」へ立ち寄った。

境内には、天神様のお遣いである、牛の石像が鎮座することでも知られ、私がうし年で、いつも妻のうさぎ年が先行する、後ろめたさでもあるのか、妻が勝手に牛を因縁付けて「ぜひ立ち寄りたい」との希望で、訪れることになった。

子供たちの学問成就を意識するとともに、牛との因縁も意識し、境内に入っていくと、本殿よりも、牛の石像が目立っていた。牛を撫でると御利益があるということで、多くの人々の願いが込められて、石像は黒光りしていた。

我が家もしきたり通り「子供たちが思うがままに自由に生き、夫婦がいつまでも仲むつまじく」との願いを込め、牛の焼き物を奉納し、牛をたっぷりと撫で回してきた。

高山市街から、少々山間に入ったところに「飛騨の里」はあった。入口の前にはみやげ物屋や食堂、レストランなどが並んでおり、観光客の受け入れ態勢は万全で、観光バスも多くやって来ていた。

「飛騨の里」に一歩足を踏み入れると、そこは別世界だった。山間の森を切り開き、飛騨の各地から移築された、合掌造りの家々がバランス良く配置され、かつて飛騨の各地で見られた、長閑で奥ゆかしい山里を造り上げていた。入口の、行き過ぎた観光化に抵抗を感じていたのも忘れ、懐かしい故郷を、訪れた気分にさせてくれた。

山里の生活など全く知る由もないのに、藁葺き屋根の家に一歩踏み込むと、言い知れぬ郷愁に包まれていた。囲炉裏のある部屋に上がると、薪の燃える音と香りとが、煙となって漂っていた。漂う煙が染み入るように身体を包み込むと、不思議と、気持がゆったりとなって、本当にここで生活をしているような錯覚を起こさせる。

合掌造りの家は、囲炉裏から出る煙が家全体に漂って、防虫効果を発揮し、木材の朽ちるのを防いでいるようである。剥き出しになった木肌は、黒光りして、少しも傷んでいなかった。しかし、藁葺き屋根の葺き替えの問題や、間取り、炊事、洗面、照明などの生活様式の問題があって、現代生活に共することができなくなり、多くが失われてしまったようだ。

妻に「大変そうだけど囲炉裏のある生活をしてみたいな」と話し掛けると、「一度は経験してみたいわね」と妻も同意してきた。

非常に便利になった電化生活を、捨てることなどできるはずがないのに、囲炉裏のある生活が「平凡で、時間に追われない、長閑な生活」の代名詞であるかのような気になり、幻想を抱いているようだった。

何もかもが人の手から離れ、限り無く便利になっても、一方で、余計なことに限り無く煩わされ、安らぎが少なくなっているのが、現代生活ではなかろうか。多少は不便で、手間と時間を費やしても、決まったことを決まった通りに、毎日同じことを繰り返し、一日の無事を家族揃って味わえることが、最良と信じ、生きていけるほうが、むしろ幸福なのかもしれない。

山深い山里の、ごくありふれた熟年夫婦となって、のんびりと、藁葺き屋根の家々を丹念に見学していった。木々は幾分色づいて、一層情緒を漂わせ、気分は最高だった。観光客が多く、時には進路を遮るように行き交っていたが、少しも気にならず、二人の世界に没頭した。

「刺し子の実演」との看板が掲げられた、家屋に入っていくと、煙が漂ういろり端で、老婦人が、大きな紺の生地を広げ、縫い物をしていた。観光客は我々だけで、上がり込んで、囲炉裏に近寄っていくと、婦人は柔和な笑顔で、二人を迎え入れてくれた。

「根気のいる仕事で、大変ですね」と、話し掛けると、手を休め、「お蔭様で、この歳になっても楽しく仕事をさせてもらっています」と、笑顔を絶やさずに答えてきた。

「お蔭様」との心意気を、身体全体で表しながら、いかにも楽しそうに、暮らしを語る婦人の顔つきは、温もりと気品に満ち、可憐に感じられ、心を打たれる思いだった。

誘惑に満ちた現代において、年老いても品格を失わずに、心安らいだ顔つきを持ち続けるのは、至難の業である。婦人は刺し子と共に、規則的な生活を営々と続け、常に家族と頼り頼られの関係にあり、一家の重要な柱として、生活してきたのであろう。そして、仕事を続けられることが、最良と信じ、一切の迷いを持たず、回りの者も優しさに満ち、幸福な日々を送ってきたのに違いない。

「こんなお年寄りも、まだ日本に存在するのか」と思うと、無性に嬉しくなってくる。同時に、自分が、妻が、年老いたとき、果してどんな顔つきとなるのか、想像していた。

妻の横顔に、老後の姿を映し出し、「妻も飛騨の老婦人のように、いつまでも温もりを湛えていられるだろうか」との思いを巡らし、一方で、自分の役割を強く意識していた。

妻をどれだけ深く愛し、自分がどれだけ優しくいられるかが、妻の顔つきとなって表れるのに違いなかった。そっと向けられた妻の笑顔は、私の心には、この上無い温もりが感じられ、妻がいつまでも、可憐でいて欲しいと、祈る思いだった。

正に、日本人の心の故郷を感じながら、時間をたっぷりかけて、合掌造りの家々を見学して回った。時代に適合しないはずの生活様式に、むしろ、人が人らしく生きるための、

理想を見た思いで、「飛騨の里」を後にする。
飛騨の里の前にある食堂で、昼食を済ませ、再び高山市街に向う。途中「木の国館」と銘打った、アンティークの展示館が目に入った。外観は大きな建物とは感じられず、それほど期待は持てなかったが、気まぐれに立ち寄ることになった。
先ずは、蝶ネクタイの初老の紳士が「いらっしゃいませ」と、丁重に迎え入れてくれて、「すでに案内が始まっておりますので、こちらへどうぞ」と言って、奥へ案内された。
初老の婦人が、ヘッドマイクを着けて、すでに先客を相手に展示品の説明をしていた。我々も仲間に加わり、一緒に案内してもらうことになった。
初老といっても非常に若々しく、テンポの良い語り口で、展示品の謂われを明解に説明してくれた。仕事を楽しんでいるのが感じられ、はつらつとしていた。特別に着飾ってはいなかったが、華麗とは、心身共に磨き上げられた、こんな婦人をいうのだろうと思った。
どんなに着飾って華やかさを求めても、心身が伴わなければ、衣装だけが一人歩きし、華麗さは醸しだせない。虚飾に満ちた醜い顔つきをさらけ出す結果となり、華麗とは程遠い気がする。
華麗な飛騨の老婦人を見て、歳を取ることに対し、新たな認識を持ちはじめていた。一年一年、心身共に磨きを掛けて、歳を積み重ねていき、「自分の能力をフルに発揮したら、どんな年寄りになれるのだろうか」との思いが、湧いてくる。
歳相応の楽しみ方があり、「老化を嘆かずに、むしろ楽しんでしまおう」と言うものだった。これからの人生を、妻と老化と三人四脚で、人生を思いっきり楽しめるような気がしてくる。
室内は思った以上に広く、展示品も多くて、西洋アンティークの家具や石像、食器、ステンドグラスなど、非常に見応えがあった。特にウラン硝子の、紫外線を当てたときの幻想的な輝きは、大いに目を楽しませてくれた。
最後に、出迎えてくれたやはり若々しい老紳士から、コーヒーが振る舞われ、アンティークなソファーでくつろぎながら、様々な味わいを楽しんだ。
高山市街に戻り、今日の宿に向かった。未だ三時前で、チェックインには早く、駐車許可を願い出てすぐに町に繰り出した。
すっかり高山の人となり、道路は熟知して、少しも迷わずに進んでいった。雨の心配はとっくに失せて、傘無しでは腕組みも気恥ずかしく、遠慮がちとなった。それでも情緒のある石畳の道を選んで、ロマンチックな気分に浸っていた。
貪欲に観光をしてきて、いささか疲れを感じはじめ、妥協する必要があり、「高山陣屋」に的を絞って、高山観光を締めくくることにした。
「高山陣屋」は、平成八年に復元修理が行われ、非常に綺麗な屋敷だった。気持ちはいつしか時間を遡り、江戸時代の暮らしぶりを感じ取っていた。
妻の愛読書は時代小説で、妻の部屋には収めきらないほどの文庫本が並んでいる。私も妻のコレクションのご相伴にあずかり、時代小説を読んできた。その多くが、江戸時代の生活ぶりが描かれ、武家屋敷に上がり込むと、生活ぶりが瞼に浮かんできた。
二人とも現代の暮らしよりも、髷を結った時代に適合しているようで、すっかり同化していた。広い屋敷で、予定した以上に見学時間を要し、陣屋を出ると、夕闇が迫りつつあった。

宿に着くとさすがに疲れが溜まってきて、ゆっくりしたかった。今日の宿は、会社の特別契約をした保養所で、利用料金の割りには、比較的豪華なホテルだった。夕食は宿で取ることになっていて、時間までのんびりと過ごした。入浴を済ませ、お色直しをしてからディナーに向かった。

テーブルに付くと、ウェートレスがやって来て、ディナーの準備に取り掛かった。フランス料理のコースで、前菜から順番に料理が運ばれてきた。飲み物は酒とアップルジュースを注文し、折角のフランス料理が台無しのような気がしたが、こだわりはなかった。

湯上がりの妻の頬は、幾分上気してピンク色に染まり、少々色っぽく感じられた。綺麗に彩られた料理もさることながら、妻の瞳と語らいを肴に飲む酒は、甘味が増して、それほど好きではないのに、美味く感じられた。お互いに笑みが自然に湧いて出て、高山最後の夜を満喫していた。

高山では、けっして天気に恵まれたとはいえなかったが、銀婚夫婦の道行きを、心行くまで満喫していた。高山の主役となって、最高のドラマを演じ、過去を追想し、これからの人生のシナリオも、思い存分作り上げていけるような気がした。

高山では全く青空が見られなかったのに、高山を離れた途端、明るい日差しが射し込んできた。飛騨の神々の、機嫌を損ねてしまったのか、それとも、熟年夫婦に対する心遣いだったのか、いずれにしても、たっぷりと楽しんできたので、不満を言うつもりはなかった。

高山から下路、中津川へと車を走らせる。どこも道路はよく整備されていて、順調な走行となり、舞台は一気に木曽へと飛んで、先ずは馬籠宿を訪れることにした。

中津川は、岐阜県と長野県の県境にあり、木曽への通過点となっている。地図を見ると、中津川から馬籠まで目と鼻の先だったが、新しい道路が忽然と現れ、地図では進路が確認できなかった。「馬籠宿」の案内板を頼りに進んでいこうと思ったが、案内板も見つけられず、道に迷ってしまった。

ただ単に、岐阜県側では案内板を見落としただけなのかもしれないが、「不親切」と思いながら、長野県側に入っていくと、「馬籠宿」の案内板がすぐに出てきて、後は造作無く進んでいけた。岐阜県、長野県、それぞれが有力な観光地を抱えており、「熾烈な観光合戦が繰り広げられている」と、想像していた。中津川から馬籠まで、やたらに遠く感じられたのである。

馬籠宿の入口に辿り着くと、真新しい大きな建物がでんと構え、「観光化に抜かりはない」と語っていた。馬籠宿は、近年に改装を加え、保存と観光を一体化し、充実を図ってきたようだ。駐車場を見つけ、徒歩に切替えて、宿場に入っていった。

十二時をとうに回っており、宿場に入ってすぐのそば屋で昼食をとった。腹ごしらえを済ませ、急な石畳の坂道を登っていくと、道路の両側に、ぎっしりと、風情のある佇まいが軒を連ね、昔の町の面影を、色濃く残していた。

木工品を中心に、名産、特産の、みやげ物を扱った店が立ち並び、格子戸が美しい陰影を造り上げ、情緒がたっぷり漂っていた。平日にもかかわらず、中高年の観光客でごった返していた。賑わいに幾分しり込みしたが、いつしか時間を大きく遡り、気分は難所だらけの中仙道を旅していた。

無意識のうちに、じゃれ合うように妻の手を引いて、急な坂道を登っていった。ふと気

がついて、そんな二人の姿が、我ながら「絵になる」と感じた。すっかり役者気取りで足取りも軽やかになり、馬籠宿の主役となって、銀婚夫婦の道行きを演じていた。

馬籠は、島崎藤村の縁の地で、立派な記念館があり、時間をたっぷりかけて見学する。島崎藤村の、代表的な詩に「初恋」があり、思春期に暗唱したのを覚えていた。再び「初恋」に接し、韻のある美しい文章に、少なからず影響を受けていた。詩で妻を語ってみたいとの、強い衝動に駆られた。

六百メートルほどの、急な石畳の坂道を登り詰めると、馬籠宿のもう一方の入口に着く。町並みが途絶えた先には、正に、昔ながらの急峻な中仙道が続き、山間に分け入っていく。皇女和宮を意識して、「昔の旅を少し経験してみよう」と、進んでいくが、険し過ぎて、すぐに戻ることになった。

馬籠宿を後にして、旧中仙道を、妻籠宿に向けて車を走らせる。馬籠峠を越えた先は、急カーブが多く、神経を使いながら、エンジン音を唸らせて下っていった。たった十キロほどの行程だが、宿場間の行き来は難所続きで、非常に危険な道中と想像された。

妻籠宿は、昔ながらの中仙道沿いに残り、国道よりも大分高所にあった。入り口には大きな駐車場があって、車で入っていくのは遠慮した方がよさそうだったが、今日の宿の女将に、「駐車場は完備しているので、宿まで上がってくるように」と言われていた。

細くて急な坂道を、観光客で賑わう町並みまで登り詰め、妻籠宿の北の外れにある、宿まで進んでいった。対向車でもあろうものなら、身動きが取れなくなるのは必定で、幸運にも何とか宿に辿り着いたが、後悔していた。宿からさらに外れの駐車場に車を置いて、何とか宿に落ち着いた。

宿は、昔ながらの旅籠を改装して営まれる民宿で、宿場巡りに相応しい、情緒ある佇まいだった。既に四時になって、日が大分傾きはじめたが、夕食までに未だ間があるということで、疲れを見せずに町へ繰り出した。

馬籠宿に負けず、情緒溢れる町並みが広がっていた。日差しが遠のくと、観光客が急激に少なくなり、一瞬ではあるが、人通りが全く途絶え、現代が全て消え去って、完璧な宿場が展望できた。空だけが幾分青さを残した、夕暮れと相まって、微かな暗さが程よいぼかしとなり、古さを一層際立てた。写真を撮るには暗過ぎたが、肉眼では最高の映像で、思わず佇んで、ため息が出た。

妻籠宿には、旅籠の趣を残した旅館や民宿があり、旅情を求めて、妻籠に宿を取る者も少なからずいるようだった。我々と同様に、夕食までの時間を惜しんでか、夕闇迫る町並みを、観光客が行き交っていた。結局、人の姿が消えたのは、ほんの僅かな時間だけで、非常に幸運だったといえる。古い行灯に灯が灯り、後は闇が勝って、宿に戻るしかなかった。

宿泊客が一堂に介して夕食となった。宿の女将の、日本文化を伝承する心意気が、お喋りと料理に伝わって、エールを送りたい気分だった。心尽くしの料理に舌鼓を打って、銀婚旅行の最後の夜を味わった。女将の言葉尻に、保存と生活との狭間に立ち、人知れず苦労があるのを垣間見て、妻としみじみ「大変だね」と、語り合っていた。

部屋に戻って二人になると、くつろぎのときが訪れ、満腹の腹をさすりながら横になった。いつしか居眠りが始まって、気が付くと九時を回っていた。壁に掛けられた色紙が目に入り、覗いて見ると、島崎藤村の「初恋」が記されていた。馬籠から引き続いて、強い

刺激となり、無性にペンが持ちたくなった。

「初恋」の、物真似がてらに言葉を選んでいると、妻を思う気持ちがほとばしり、今までに書いたことのない韻文が綴られていた。旅路での、いじらしい、妻の心の機微にふれたやりとりと、折々に見せた妻の可憐な仕種が、瞼に映し出され、五十路男が年甲斐もなく、恋心を呼び起こしていた。妻を思えば思うほど、何故か涙が溢れ出た。

隣で居眠りをする妻を尻目に、書き綴っていると、次から次へと言葉が出てきて、時間が過ぎるのも忘れていた。詩人になるつもりはなかったが、心の叫びを託すにはもってこいだった。

今回の旅行では、目にしたものを、少しでも多く書き残したいと思っていたが、妻とのロマンスを演じるのが精一杯で、書き綴ったの、はほんの僅かだった。現実と空想とが一体となり、夢のような時を旅して、ペンは全く不要の世界だった。

愛しい妻の語部として、これからの人生を再構築したいと、強く願っているが、限られた時間を制し、創作を続けていくのは至難の業である。気まぐれに詩を綴ってみたところで、戯言に過ぎなくなってしまう。現実に引き戻されると、先行きが見えないかぎり、一歩も前に踏み出せないことを、痛いほど感じていた。

最終日の朝は雲一つ無い秋晴れで、木曽の神々は、銀婚夫婦を快く迎え入れてくれたようだった。朝食を済ませると、早々に宿を出て、昨日の不足を取り戻そうと、古き町並みをそぞろ歩きする。夕闇に浮かび上がった宿場風景も圧巻だったが、朝日に映し出された風景も活気に満ちて快い。

馬籠、妻籠に続く、木曽十一宿の残りの宿場町を、木曽路を上り詰めながら見学していくのが、今日の日程だった。十一時前に妻籠を発って木曽川に出る。三里、約十キロの間隔で、かつての宿場が出てくる。良く整備された中仙道から、少し入った狭い旧道沿いに、宿場町の名残を残していた。三留野、野尻、須原と、観光化からは取り残されているが、宿場の面影を残す建物が散在していた。

木曽川は、上るにつれて変化に富んでくる。「寝覚の床」と呼ばれる、木曽川きっての渓谷美を誇る景勝地を訪れる。浦島太郎伝説にちなんだ名前で、竜宮城から戻った浦島が玉手箱を開け、夢から覚めて老人になった場所だそうである。川を仕切るように、人工的にも見える角張った岩盤が、幾重にも重なって、張り出した姿は絶景だった。

上松宿を経て木曽福島に入り、十二時を回っていたので、福島宿で信州蕎麦を賞味することになった。歳を取るに連れて蕎麦に興味を持ち、蕎麦の味を求めて名のあるそば屋を訪れるようになっていた。今回立ち寄ったそば屋は、全く情報外で、町に入って最初に目についたそば屋で、たまたま車が出て、駐車場が空いたので立ち寄ってみたのである。

二枚重ねのもりそばと、月見そばを注文し、つゆの色合いが少々濃口に見えて、田舎仕立てと幾分侮って、蕎麦に箸をつけた。つゆをからめて口に運び、じっくりと味わってみると、今まで経験をしたことがない、衝撃的な味わいがあった。

蕎麦の味もさることながら、蕎麦本来のうま味を引き出す、田舎仕立てと侮ったつゆの味に、蕎麦に対する考え方を根本的に覆されていた。蕎麦は蕎麦、つゆはつゆで、独立したものとして認識していたが、信州の長い歴史が育んだ、特製醤油と特製蕎麦とが一体となって、相乗効果を上げ、「極めつけの味を引き出している」と、知ることとなった。

「最後に、最高の御馳走にありつけた」と、妻に同意を求めながら、何もかもが、二人

を祝福してくれていると思った。「子供たちにも是非味合わせてやりたい」との思いと、再度訪れることを誓って、店を後にした。

中仙道に出て、宮ノ越、藪原と宿場巡りを再開した。奈良井宿は、馬籠、妻籠に負けず劣らず、情緒溢れる町並みを残していた。一キロほどに渡って古い町並みが続き、歩き出があって、「木曽路きっての大宿場町」と言う実感が湧く。

奈良井宿も多くの観光客が訪れ、高山、馬籠、妻籠もそうであったように、中高年を中心に、古きものに憧れる、日本人がいかに多いかを知らされる。我々も同様に、古き町並みに言い知れぬ郷愁を感じ、一時の安らぎを味わっていた。

日常生活では便利さばかりを追求し、新しいものに目を向けがちで、ややもすると、物質に対する欲求は狂気に近いものがある。日本の社会そのものが常軌を逸し、人間らしさが希薄になっている。物質的な豊かさとは裏腹で、心の豊かさが置き去りになって、安らぐことの少ない生活となっている。

微かな流れとして、日本人が本来持っている感性がくすぐられ、人間らしさを求める回帰現象が起こっているのかもしれない。社会そのものを、軌道修正をするのは困難極まりないが、社会の底流を支える人々が、一人でも多く、心の豊かさを求めるようになれば、時代が変わっていくはずである。

日本人の人間らしさを呼び起こす、心の故郷として、伝統を引き継ぐ人々の役割は非常に大きいものがある。保存と生活との狭間に立って、並大抵の苦労ではないかと思われるが、日本古来の文化を「いつまでも守っていって欲しい」と祈る思いだった。

最後に贄川宿を通過して、木曽十一宿を走破し、飛騨、木曽と、古き町並みを巡る旅は完結した。銀婚夫婦に相応しい旅となり、心行くまで楽しんできた。

たった四日間の短い旅であったが、計り知れない、多くのものを得た気がする。今までが、歳を重ねるにつれて、より良い人生となったように、これからも、老化と共に、さらに磨きが掛かると思っている。妻に対する思いは、益々深まり、新たな人生に向けて、揺るぎないものを心に宿した気がする。妻の瞳も「同感」と語っているようだった。